

小学校でも、英語のように手話教育を

廣石裕子

(青山キャンパス、フリーライター)

千葉の焼肉店の彼が、その後、手話を勉強し、先生と再会したときにはペラペラになっていたというお話に、とてもとても感動しました。「自分は目は見える、耳が聞こえないのだ」と言われ、「盲」と「ろう」の違いを説かれながら、彼の中で何かが崩れたのでしょうか。それが涙になったのですね。悔しい気持ち。一種の挫折でもあったのかなあと思いました。

たしかに、その方が子ども時代に早瀬先生に出会っていたら、焼肉店での出来事はなかったかもしれません。でも、それと同時に手話ペラペラの彼もまた存在しなかったかも、と思うと、少しもったいない気もします。そのタイミングだったからこそ大きな影響を受け、手話を身につけるという行動に結びついたのではと思いました。とにかく、時機云々は置いておいても、お2人が出会い、再会し、思わずハグしたという事実にはジーンとして、聞いていてなんだかとてもうれしくなりました。

もう1つ感銘を受けたのが、当たり前を壊し新しいものを生み出す生き方です。音のないお化け屋敷のお話は目からウロコでした。私は先日、浅草花屋敷にあるレトロなお化け屋敷に入りましたが、言われてみると、確かに恐怖心をより煽るのは、音だったように思います。

そういえば、趣味でときどき行っている山での怖さも、森の奥や頭の上、足元から聞こえてくる音の影響が大きいことに気づきます。しかし一方で、聞こえて当たり前と思っている音は常に聞こえていてほしい。だから、まったく音がないのは不気味です。

音による前兆がないまま目の前で何かが起こるなんて恐ろしい！そこをついたお化け屋敷……入ってみたいです。

以前、手話を習っていました。講義の後、このことを手話でお伝えしてみましたが、まったく中途半端で失礼いたしました。

きっかけは憧れという大変ですが、町中や電車の中などで出会う手話を話す方たちを見ているうちに、自分も話してみたいと思うようになったのでした。手話を話す人の比率はまだまだ低いかもしれませんが、私は手話で会話をしている人によく会います。これはきっと、手話を意識しているからだと思います。

これに関連して思い出したのですが、以前参加した講演会で、ある医師の方が、「私たちはニュース番組を見た後、ニュースの内容はよく覚えている。しかし、キャスターのネクタイの色を覚えているだろうか。10分、20分と、ずっと見ていたはずなのに、その色がわか

らないのは、意識していないからではないですか？」と、私たち会場にいた者に問いかけをされました。

「目の前の患者さんの苦しみがどこにあるにか、その苦しみを支えているものは何か、意識すると見えてくる、すると何をしてあげられるかもわかってくるんですよ」というのがその問いかけの主旨でした。

「東日本大震災のとき、聞こえない方たちには音による避難の呼びかけが届かず、被害が広がった。防災無線を設置するときに、ろうの人たちのことをしっかり意識していればほかの準備もしたはず」という早瀬先生の指摘にもつうじ、考えさせられました。

手話の勉強は、初級コースを週1回×3年続けましたが、片言レベルで卒業。読み取りのほうは苦手なままです。もしあのあとも勉強を重ね、手話を身につけていたら、先生の言葉をもっとダイレクトに感じられたでしょうに。今回は、山口千春先生のすばらしい通訳に助けていただきましたが、やはり、自分の感覚でとらえることができたらどんなにいいかと思います。そのためにはやっぱり手話を勉強せねばと、いまさらながら思いました。

日本では数年前、小学校での英語教育が必須になりましたが、手話もそうなるといいと思います。同じ日本人同士なのに、言葉の壁があり、そのことに大人になってから気づいたときはショックでした。また、個人的には手話は豊かな言語だと感じています。「奈良」や「横浜」の手話のくだりて話された単語の成り立ちもしかり、感情表現もしかり。

立場や位置関係、時間の流れなどまで、手の動きや表情で瞬時に表現できるのは見事だと思うのです。授業で見せてくださった映画監督の「OK」のいろいろも、その豊かさを物語っているように思います。

聞こえることが普通、ではない。自分が暮らしている環境とは違った世界を想像することで、表現やコミュニケーションの幅はもっと広がるのだと実感できました。

ありがとうございました。